

明代白話小説に見る女性の才

——『三言』を中心にして——

張 軼 欧

封建社会における女性の社会的地位は男性よりも相当に低く、男性と同じ視点で論じることはできないが、女性の知恵は古い時代から男性に注目されてきた。

漢代の劉向によって著された『列女伝』は中国女性の初めての人物伝記と考えられている。『列女伝』の巻二の「賢明伝」、巻三の「仁智伝」には女性の知恵に関して明確に記録されている。その後、南朝の『世説新語』の「賢媛第十九」にも知的な女性のことを記している。唐の時代、特に則天武後の時期には、女性の知恵が認められ、則天武后以外に政治活動に参加している女性もいた。唐代以後、女性の社会的地位はだんだん低くなり、女性の知恵も次第に無視されるようになった。特に、明末になると、“女子無才便是德（女子は才の無いことが即ち徳である）”という考え方が社会に流行し始め、女性に勉強させない風潮が生まれた¹⁾。ここで言う“才”とは学問のことと考えられていた。

しかし、その一方、明末の短編白話小説集『三言』には智慧のある女性が多く登場している。これらの女性たちはただ学問を持っているだけでなく、いろいろな面でその智慧を発揮している。『三言』では、これらの女性に対して、批判ではなく、賞賛の姿勢が看取できる。小論では、明末に生まれた『三言』に呈示されている女性の“才”が具体的にどのような特徴を持つのかについて検討したい。

一、『三言』の編集者馮夢龍と『智囊』

前述したように、“女子無才便是德”という風潮が明末に生まれ、その観念が次第に人々の頭に染み込んだ結果、多くの人は女性に勉強をさせなくなかった。しかし、すべての人がその風潮を肯定していた訳ではない、『三言』の編集者である馮夢龍はそういった風潮に最も早くから警鐘を鳴らしていた人物であった。

『智囊』は、天啓6年(1626)、馮夢龍が53才の時に編集された書物である²⁾。明末までの各時代の智慧を持つ人物の物語が収録されており、「上智」、「明智」、「察智」、「胆智」、「捷智」、「術智」、「語智」、「兵智」、「閨智」、「雑智」の十編に分けられ、全部で1238編智慧に関する物語を収録されている。「上智」、「明智」、「察智」に収録されている歴代の政治に関する物語は馮夢龍の政治や官僚に関する考え方を現している。「胆智」、「捷智」、「樹智」などに収録されているのは政務管理の手段に関する物語である。「語智」は論巧者のことを記録している。「兵智」に収録されているのは、奇策、良策で戦争に勝利した物語である。「雑智」はざる賢さに関するものである。「閨智」は智慧をもつ婦人のことである。

馮夢龍は自身の智慧に関する考え方を、『智囊』の序文において次のように述べている。

人間に智慧があることは、大地に水があることを如く。大地に水がなければ焦土になり、人間は智慧がなければ生ける屍になる。智慧が人間によって使われることと、大地に水を流すことは同じことである。海拔が低ければ水びたしになる。人事をおろそかにしているならば、智慧でそれを補う。古今で成功や失敗の例を見れば、みなそうである³⁾。

以上の序文から分かるように、馮夢龍は人間の智慧をかなり重視している。

馮夢龍は『智囊』の第九部「閨智」の「閨智部総序」に、次のように記述している。“馮子曰く：‘男子は徳があれば即ち才であり，婦人は才の無いことが即ち徳である。’”という説があるが，本当にそうであるのか？麒麟は縁起が良いものであるが，鼠を獲ることが出来ない。鳳凰は綺麗だが，兔を獲ることが出来ない。春秋時代には申生なる大変親孝行な人がいたが，その才能はどこにあったのか。周の時代において，もっとも賞賛された人物は邑姜である。孔子は彼女の才能が当時の功臣豪傑に少しも劣っていないと称えている。才能があるために徳が低く評価されたという話を聞いたこともない！”⁴⁾

上述の序文から分かるように，馮夢龍は徳があるが才能に恵まれなかった申生の例や，才能も徳もある邑姜の例を通して，男性であろうが女性であろうが，その徳は才の有無には関係ないと主張した。彼は明末の女性に勉強させない風潮に対して疑問を抱いていたものと思われる。“女子無才便是徳”という觀念に抵抗する様子は，『三言』に登場する女性像からも窺うことができる。

二、『三言』における字を読める女性

『三言』に登場する女性は総数270人程度であり，その中で，作品の内容から明らかに字を読めると明記されているのは次の表で示すとおり70人である。作品の中で字を読めるかどうかが明確でない女性もいるが，字を読めないと断定できる材料もない。女性の置かれた家庭環境や家族の官職などから判断して，字を読める可能性がかなり高いと推測される女性も相当数存在する。例えば，官僚の娘の阿秀，順哥，張如春，名妓である杜十娘，穆廿二娘，皇帝の妃である韓玉翹，寺の主持である静真，金持ちの娘淑女，方氏などである。したがって，『三言』に登場する女主人公の識字率は実

際にはさらに高くなるものと考えられる。次表から分かるように、彼女たちの身分や出自は様々である。金持ちや官僚などの娘、妻などもいれば、一般庶民もいる。彼女たちは文字を読めるだけでなく、霍員外の妾、蘇小妹、白娟娟、賀秀娥などのように文章や詩まで嗜む者もいる。このように、『三言』を編纂する際、馮夢龍は女性主人公の教育水準を高めを設定し、明末の“女子無才便是徳”という風潮に同調しない姿勢をとっていることを臭わせている。

表 『三言』における文字を読める女性たち

番号	名前	作品	出自	作品における身分	識字の有無	主人公(○)
1	王三巧	喻(1)	王公の娘	商人の妻	三巧児正在傍辺閑看, 偶見宋福所告人命一詞(王三巧児はちょうど傍で閑潰して見ている所, たまたま宋福の人命に関する上訴書を見た)。	○
2	薛婆	喻(1)		媒酌人	陳大郎が彼女に手紙を出した。	
3	平氏	喻(1)		商人の妻	平氏拆開家信, 果是丈夫筆迹(平氏はその手紙をあけて見ると, 確かにそれは夫の筆跡であった)。	
4	田氏	喻(2)	貢元の娘	職不明の庶民の妻	通書達礼(本を読み, 礼儀を良く知っている)。	
5	韓金奴	喻(3)		妓女	在房中磨墨揮筆, 拂開鸾箋写封簡(部屋で墨を擦り, 筆を振るい, 紙を開いて手紙を書いた)。	○
6	陳玉蘭	喻(4)	官僚(太尉)の娘	官僚の娘	琴棋書画, 無所不曉(琴, 棋, 書道, 画などに精通している)。	○
7	王媪	喻(5)	王公の姪	未亡人	接得母舅王公之信(叔父の手紙を受け取った)。	○
8	張氏	喻(8)		官僚の妻	教育を受けたことがある。兒子吳天祐從幼母親教訓, 讀書知識字(息子の吳天祐は幼いころ母親に従って勉強し, 文字を読める)。	
9	謝玉英	喻(12)		妓女	每聽人傳誦, 輒手録成帙(他の人が詩を詠っているのを聞	○

					くと、すぐそれを記録し、装丁する)。	
10	周月仙	喩 (12)	やり手婆	妓女	更通文墨 (又、本を読み、字を書ける)。	
11	柴夫人	喩 (15)		未亡人	柴夫人修了書 (柴夫人は手紙を書いた)。	○
12	春娘	喩 (17)	官僚の娘	妓女 後官僚の妻	春娘從小読過經書 (春娘は小さいとき經書を読んだことがある)。	○
13	李氏	喩 (18)		職不明の庶民の妻	修書致意李氏 (李氏に挨拶の手紙を書いた)。	○
14	霍員外の妾	喩 (23)	霍員外の妾	員外の妾	ハンカチに詩を書いた。	○
15	素香	喩 (23)	庶民の娘	職不明の庶民の娘	詞後復書雲 (詞の後ろに手紙を書いた)。	○
16	鄭夫人	喩 (24)	貴妃の養女	官僚の妻	見壁上有数行字、思厚細看字体柔弱、全似鄭義娘夫人所作 (見ると、壁に数行の文字を書いてある。思厚はその字を見て、字体が細いので、鄭夫人が書いたものとよく似ていると思った)。	○
17	劉金壇	喩 (24)	未亡人	官僚の妻	就懷中取出金壇所作之詩 (胸の中から金壇が作った詩を取り出した)。	
18	金玉奴	喩 (27)	金持ちの娘	読者人の妻	詩賦俱通、一写一作、信手而成 (詩や賦などはみなできる。書くとき、すぐ書ける)。	○
19	祝英台	喩 (28)	庶民の娘	庶民の娘	自小通書好學 (小さい頃から勉強するのが好きだ)。	○
20	黄崇嘏	喩 (28)	孤兒	女秀才	詩賦俱通 (詩や賦などはみなできる)。	○
21	黄善聡	喩 (28)	小商売人の娘	商人	和那帳目也交付与張勝 (その帳簿も張勝に渡した)。(文脈から黄善聡が帳簿を付けていると判断できる)	○
22	柳翠翠	喩 (29)	官僚の娘	官僚の娘	天生聰明、識字知書。詩詞歌賦、無所不通、女工針指、無有不会 (生まれつきで聡明であり、字を知り本を読める。詩、詞、歌、賦などに精通しており、針仕事もできる)。	○
23	文女	喩 (33)	官僚の娘	仙人の妻	從此以後便会行文 (それ以後文書をかけるようになった)。	

24	称心	喻 (34)	仙人の娘	読者人の妻	聊有小詩 永為表記 (永遠の記念とするために、詩を作った)。	○
25	王氏	喻 (35)		読者人の妻	就燭下把起筆来, 于紙上写了四句 (燭光の下で、筆を取り、紙で四句の文書を書いた)。	
26	楊氏	喻 (35)		官僚の妻	婦人看着簡帖上言語, 也没理会所 (婦人は手紙に書かれた文書を読んで、気にしてなかった)。	○
27	童小姐	喻 (37)	太尉の娘	金持ちの妻	童小姐聽得黄家有了日子, 要成親, 心中慌乱, 忙写一封書, 使養娘送上太太。(童小姐は黄の家が既に日取りを決め、挙式しようとしていると聞き、慌てて一通の手紙を書き、母親に出した)。	○
28	閻淑女	喻 (40)		秀才の妾	閻氏親自教他念書, 五經皆已成誦 (閻氏自らが彼を教え、彼は五經全部を読めるようになった)。	○
29	田氏	警 (2)	地位がある家の娘	読者人の妻	妾読書知礼 (妾は本を読み、礼儀を知っている)。	○
30	老嫗	警 (4)	田舎の農民	未亡人	詩を書ける。	
31	呉国夫人	警 (4)		官僚の妻	私自写出与呉国夫人看之 (自分でそれを書いて、呉国夫人に見せた)。	○
32	卓文君	警 (6)	金持ちの娘	未亡人	琴棋書画無所不通 (琴、棋、書道、画などに精通している)。	○
33	関盼盼		妓女	官僚の妾	我作之詩 (私が作った詩である)。	○
34	鄭氏	警 (10)		進士の妻	進庵做了道姑, 拜佛看經 (庵に入って、女道士になり、仏像を礼拝し經書を読む)。	○
35	押司娘	警 (13)		官僚の妻	押司娘教迎兒取將紙硯来, 写了帖子 (押司娘は迎兒に紙や硯を持って来させて、手紙を書いた)。	○
36	六姨	警 (17)	金持ちの娘	読者人の妻	六姨是個女中丈夫, …, 乃将白金百兩, 新衣数套, 親筆作書, 緘封停当, … (六姨は女性の中の丈夫である, …, 銀百兩, 新しい服を数着, 自分が書いた手紙をきれいに封を	○

37	趙京娘	警 (21)		庶民の娘	した)。 京娘取筆題詩四句于壁上 (京娘は筆を取り、壁に詩を四句を書いた)。	○
38	劉宜春	警 (22)	船頭の娘	職人の娘	宜春、…口中微吟四句：“毡笠雖然破，經奴手自縫。因思戴笠者，無復旧時容。” (宜春は小さい声で次の詩を吟じた。“毡笠はぼろぼろであるが、私は自分でそれを繕う。毡笠をかぶる者のことを思っても、その人はもう昔の姿に戻れない)。	
39	順娘	警 (23)		塾の先生の娘	兩個幼年，嘗同窓讀書 (二人は小さい頃同じところで勉強したことがある)。	○
40	玉堂春	警 (24)		妓女	玉姐叫丫頭將試錄拿上樓來，展開看了 (玉堂春は使用人に手紙を二階に持ってこさせて、あげて見た)。	○
41	何仙姑	警 (27)		幽霊	仙姑覽詩 (仙姑は詩を読んだ)。	○
42	李鶯鶯	警 (29)	官僚の娘	官僚の娘	女見詩大喜 (女は詩を読んで、大変嬉しかった)。	○
43	女兒	警 (30)		農民の娘	忽見白板扉上詩 (ふっと白い扉の上に書いた詩を見かけた)。	○
44	趙春兒	警 (31)		妓女	寄信去請他来 (彼が来るように手紙を出した)。	○
45	王嬌鸞	警 (34)	官僚の娘	官僚の娘	嬌鸞幼通書史，舉筆成文 (嬌鸞は幼い頃書史に通じ、筆をもって文をつくった)。	○
46	曹姨	警 (34)		未亡人	曹姨書中亦備說女甥相思之苦 (曹おばさんも手紙の中に姪が彼を恋しい気持ちを詳しく書いた)。	
47	非煙	警 (38)		官僚の妾	好詩弄筆 (詩を書くのが好きだ)。	○
48	寿奴	警 (39)	お化け	職人の妻	写字讀書 (字を書き、本を読む)。	○
49	月娘	醒 (1)	官僚 (県知事) の娘	官僚の息子の妻	教他識字 (彼に字を教えた)。	
50	莘瑤琴	醒 (3)	雑貨商の娘	妓女	七歳上，送在村学中讀書，日誦千言 (七歳の頃、村学に勉強に行かせると、一日千言を	○

					暗誦した)。	
51	丫鬟	醒 (3)		使用人	那丫鬟也認得幾個字 (あの召し使いも幾つかの文字が読める)。	
52	王媽媽	醒 (6)		未亡人	却是母親手筆 (自分の母親が書いたものである)。	
53	秋芳	醒 (7)	金持ちの娘	金持ちの娘	那秋芳資性聰明, 自七歳讀書, 至十二歳, 書史皆通 (秋芳は賢くて聰明であるため, 七歳から勉強し始めてから十二歳までに書史を全部分かるようになった)。	
54	多福	醒 (9)		農民の娘	多福看了詩句, 一言不發, 回到房中, 取出筆硯, 就在那詩後也写四句…。 (多福は詩を読んで, 一言も言わず, 部屋に戻り, 筆を取り出し, 其の詩の後ろに四言の詩を書いた)。	○
55	劉方	醒 (10)		軍士の娘	肯教劉方讀書 (劉方に教えた)。	○
56	蘇小妹	醒 (11)	官僚の娘	官僚の娘	小妹題詩 (小妹は詩を書いた)。	○
57	琴娘	醒 (12)		芸妓	会曉六芸之事 (六芸は全てに心得ている)。	
58	空照	醒 (15)		尼僧	金書小楷, 字体模倣趙松雪, 後注年月, 下書: “弟子空照薰沐写。” (金の字体の楷書である。字体は趙松雪の真似し, 後ろに日付を書いており, その下には “弟子空は照薰沐写” と書いている)。	○
59	白玉娘	醒 (19)	官僚の娘。	使用人の妻	把那些經典諷誦得爛熟 (それらの経書をすっかり暗誦している)。	○
60	白娟娟	醒 (25)		読者人の妻	单喜他深通文墨, 善賦能詩 (ただ彼女がよく本を読めることや, 上手に賦, 詩などを作れることが好きだ)。	○
61	顧夫人	醒 (26)		官僚の妻	夫人写下疎文 (婦人は疎文を書いた)。	
62	玉英	醒 (27)		官僚の娘	請下一個老儒, 把玉英, 承祖送入書堂讀書。 (年配の先生にお願いして, 玉英, 承祖を	○

					書堂で勉強させた)。	
63	桃英	醒 (27)		官僚の娘	連桃英, 月英也送入書堂讀書 (桃英, 月英さえも書堂に勉強に行かせた)。	
64	月英	醒 (27)		官僚の娘	63と同じ	
65	賀秀娥	醒 (28)		官僚の娘	讀書識字, 写作俱高 (本を読むことや, 文書を作ることはみな良くできる)。	○
66	玉娥	醒 (32)		商人の娘	幼時吾母教以讀書 (小さい頃は母親は教えてくれた)。	○
67	魏夫人	醒 (33)		読者人の妻	因取家書呈上, 夫人拆開看了 (そして夫人は家からの手紙を取り出して読んだ)。	
69	王氏	醒 (33)		読者人の妻	自己朝夕看經念佛 (自分が毎日經書を読む)。	
70	蔡瑞虹	醒 (36)		官僚の娘	瑞虹沐浴更衣, 写下一紙書信 (瑞虹は沐浴し, 着替えてから, 一通の手紙を書いた)。	○

三、『三言』における“才”の分類

『三言』の編集者馮夢龍は“才”に対して次のように解釈している。“才”というのは、智慧である（夫才者，智而已矣）（『智囊』の「閨智」の序）。それでは、『三言』は智慧のある女性の物語を通して、具体的に女性の“才”の意味合いをいかに現しているのか。この問題を解決するため、『三言』に登場する智慧のある女性の具体的な行動を分析しなければならない。分析を容易にするため、物語の内容に基づいて以下のような分類を行ない、それぞれの場合において、彼女たちの行為に潜む智慧を汲み上げることにする。1, 学問型。2, 内助・復讐型。3, 男装型。4, 援助型。

1, 学問型

この型に属しているのは蘇小妹 [醒 (11)] と黄崇嘏 [喩 (28)] 二人である。彼女たちは当時の男性と比べても学問に関して大変優れていた。

蘇小妹は名儒蘇洵の娘である。彼女の聡明さは世に並ぶものが無く、一

を聞いて二を知り、十を尋ねて十を答えるというほどであった。彼女の学問的な才能は幼少の頃から父に見出され、十歳からは勉強ばかりさせられ、女がする仕事は一切させなくなった。蘇洵は娘の才能を認めつつも男として生まれなかったことを大変口惜しく思っている。彼はかつて“惜しいことに女である！もし男であったら、科挙試験に首席で合格する人物になれるだろう⁵⁾！”と嘆息した。後世の人は彼女の才能を次のように評価した。“文は三蘇ときまっているが、小妹の才能は男より勝る⁶⁾。”

蘇小妹の物語は、女性であるという理由だけで、彼女の優れた才能を発揮することができないのを大変口惜しく思う気持ちが表れている。一方、黄崇嘏の物語の場合、彼女に男装させることにより、その才能を発揮させている。黄崇嘏（男装した女性）の才能は宰相周庠に認められ、郡の属官となって行政面に腕を振るった。その結果、“長い年月にわたって解決しない問題は、崇嘏によって、どれも解決された⁷⁾”という世評を受けるに至った。

2. 内助・復讐型

この型に属しているのは、呉国夫人 [警 (4)], 趙春児 [警 (31)], 万秀娘 [警 (37)], 玉英 [醒 (27)], 蔡瑞虹 [醒 (36)] の5人である。彼女たちは特に学問に優れていたというわけではなく、物の理を知り、遠見卓識があり、一家の大黒柱として家族を守った。本来、家族を支え、守るのは男の役目だが、彼女たちは自分の智慧で家庭を守ったことが注目される。

呉国夫人は宋の王安石の妻である。王安石は新法を強行し、その新法は人民を苦しめた。王安石に対する不満が全国のあちらこちらに聞こえるようになった。呉国夫人は早速王安石に官職を辞めさせ、田舎で静かに晩年を送らせた。この物語の中では、呉国夫人の智慧を明確に褒めてはいない。が、結果的に見て、王安石が妻の話を聞き入れ、官職を辞したことで、そ

れ以上国民の不評を買わずに済んだのは事実である。

女性の忠告を聞かずに、不幸になった例は、馮夢龍の『智囊』「閨智」の婁妃に関する物語である。明の寧王が叛乱を企てている時、婁妃に翻意を促されたが、結局、彼はその言葉に耳を貸さなかった。その結果、彼は投獄され、“私は婦人の言を聞かず、家を無くし国が滅び、悔やんでも遅い⁸⁾”と言った。女性の言葉に耳を貸さなかったため、後悔のみならず命すら落としてしまったのは蔡瑞虹の父である。彼女は“才能や知識があり、家の全てを彼女が管理していた⁹⁾。”彼女の父の蔡武は酒好きであった。彼が官職に任命された時、蔡瑞虹は、父は酒癖が悪いので、その官職を拝命しても、家族にとっては良くないと父に言ったが、蔡武は耳を貸そうとはしなかった。結局、赴任の折、蔡瑞虹を除く家族全員が強盗に殺害されてしまった。蔡武は死に際に、泣きながら、“お前の言う事を聞かなかったせいで、このような運命になった¹⁰⁾”と後悔の気持ちを彼女に漏らした。その後、彼女は家族の仇を討つために、いろいろな恥を忍び、最後にはその宿願を叶えることができた。物語の最後に、彼女の行為を次のように賛美している。“仇を討つのは男性である。誰も女性が仇討ちをするとは思わなかった¹¹⁾”。

万秀娘の物語も蔡瑞虹に通じるものがある。悪人の苗忠に財貨を奪われ、息子を殺された挙句、自分も誘拐され、彼の夫人にさせられた。彼女は苗忠のもとから逃げ出すために、好機をずっと捜し続けていた。ある日、苗忠のところに泥製の置物を仕入れにきた合哥に秀娘が助けを求めたことで、秀娘は救出され、苗忠は処罰されたのである。彼女たちは自分の手で悪人を処断してはいないが、悪人が相応しい罰を受けるまでずっと我慢し、好機を待っていた。仮に、自分の家族が殺された後、辛抱強く機会を待つ事が出来なかったら、きっと家族の仇を討つことはできなかったであろう。

万秀娘と蔡瑞虹は第三者の力を借りて、悪人たちを処断するに至らせたが、玉英は自分の手により悪人を処断している。玉英は武官の李雄の長女

である。李雄は妻と死別した後、焦氏を後妻に迎えた。焦氏の目的は李雄の財産を奪うことであり、玉英兄弟のことが憎くてならなかった。李雄が戦争で死んだことで、焦氏の継子いじめはますます酷くなった。まず、玉英の弟を毒殺し、妹の桃英を下女として売り払い、月英には乞食をさせて稼がせ、玉英を無実の罪で投獄させた。玉英は焦氏を訴え、焦氏とその兄は処刑され、解放された玉英三姉妹はそれぞれ士人に嫁いだ。

この型に属している趙春児はもともと妓女であった。「趙春児重旺曹家莊」という物語の冒頭で、妓女のことを次のように述べている。“古い時代から志がある婦人は男子に勝ると言っている。婦人の中で、娼妓は最も賤であるが、その中には優れている者も多い¹²⁾。”趙春児については、“大才”はないが、“あらゆる辛酸を舐め尽くし、夫を助けて家を繁栄させた。こういう事もなかなか優れているものであろう¹³⁾”と評価している。曹可成にとって趙春児は一家の大黒柱であり、彼女がいなかったら、曹可成はなにもできなかったのである。

3, 男装型

『三言』では男装し女である事を隠し通している女性の智慧も賞賛している。祝英台、黄崇嘏、黄善聡 [以上の三人は全て喩 (28) に登場する人物]、劉方 [醒 (10)] は、『三言』では男装の女性として登場している。彼女たちが男装する理由は様々である。祝英台の場合は、杭州へ遊学するためであり、黄崇嘏は自分の才能を発揮したいがためである。二人は自分の目的を達成するために、男女不平等の社会では男装が最も手近な方法だと考えたのである。また、黄善聡と劉方の場合はどちらも子供の頃、父親に男装させられたものであり、二人は似たような所がかなり多かった。二人の物語の概要を以下に述べる。

黄善聡の物語は明の弘治年間 (1488-1505) のものである。黄善聡は行商黄老実の次女である。彼女は十二歳の頃、母親を亡くした。黄老実は彼

女を男装させて、自分の甥ということにして彼女を連れて行商の旅に出た。二年後、黄老実は亡くなり、一人になった黄善聡は同宿で隣室の商人李秀卿と義兄弟になり、共同で商売することになった。二人で六年間一緒に生活し、その後、彼女は李秀卿の協力で、父の柩を故郷に運んで埋葬した。彼女は姉と再会し、姉の家で元の姿に戻った。訪ねてきた李秀卿はその時、やっと彼女が女性であることが分かり、驚くとともに、彼女に求婚した。しかし、彼女は二人で何年間も一緒に住んでいたため、世間の目を気にして彼からの求婚を断わった。経緯を知った守備太監李公は、彼女を自分の甥の嫁として娶りたいと彼女に縁談を持ちかけた。結婚した日、彼女はその甥が李秀卿であることを知った。つまり太監李公の采配だったのである。

劉方も黄善聡と同じように、十二歳の時、父親に男装させられていた。彼女の物語は明の宣徳年間（1426-1434）のことである。彼女は父親の仕事に付いていき、実家に帰る途中で立ち寄った小さな居酒屋で父親が死んでしまった。その居酒屋の経営者の劉徳夫婦は、その子が女性であることを知らずに養子に迎え、劉方と名付けた。2年後、劉徳夫婦は暴風雨で遭難した劉奇を養子にした。劉方と劉奇は親孝行者で周囲の評価も高かった。劉夫婦が亡くなってから、劉方と劉奇はその居酒屋をたたみ、緞物屋を始め、店は大いに繁盛した。劉奇は（劉方を男と勘違いしているため）彼に何回も縁談を持ちかけたが、劉方は全然聞き入れなかった。とうとう劉方は自分が女性であることを劉奇に告げ、二人は結婚した。

以上の話から分かるように、黄善聡と劉方は、二人とも十二歳の時父親に男装させられ、二十歳の頃になって、女性に戻った点や、男性との共同生活を営んだ点もほぼ共通しており（黄は六年間、劉は五年間）、また、二人の結末（結婚）も同じであり、双方で共通する点はかなり多い。馮夢龍は次のように述べている。“女であることを上手く隠し、まわりの変化に対応した¹⁴⁾”。また、“これらの行為（男装）は禮に悖るが、彼女たちは遠大な計画を立てることができる能力を持っている。彼女たちの行動を見る

と、自分に才能がないことを感じる¹⁵⁾。”彼女たちの男装は策略であり、女性の智慧を表している。男装の期間が長かろうが、短かろうが、“其智一也¹⁶⁾（その智慧は同じである）。”

4. 援助型

聞淑女〔諭（40）〕と張淑兒〔醒（22）〕は、自分の智慧で男性を絶体絶命の窮地から命を救い出した女性である。聞淑女は、架空の人物ではなく、歴史上の実在人物である。彼女は沈青霞の長男沈襄の妾である。沈青霞は嘉靖十七年に進士になっている。彼については、『明史』巻209に記録されている。『明史』には、沈青霞のことだけが記録され、沈襄と聞淑女のことには一切触れられてない。聞淑女については、明代江盈科によって編纂された『明十六種小伝』に記録されている。

『三言』の編集者馮夢龍は聞淑女を大変気に入って、聞淑女の逸話を『智囊』「閨智」や『情史』「情侠」に採用した。しかも、『智囊』と『情史』における聞淑女についての記述はタイトルこそ違っても、内容はほぼ同じである。物語の最後に付けられている評も同じである。しかし、馮夢龍が編纂した『三言』の「沈小霞相会出師表」における聞淑女についての描写は、『智囊』や『情史』とは細かい点で差異が認められる。『三言』における聞淑女なる人物像の変化は何を意味しているのか。この点を解明するには、まず、彼女の物語に関して、『智囊』と『三言』の違いを検討しなければならない。

『智囊』、及び『情史』における聞淑女に関連する記述を以下に示す。

沈青霞は丞相嚴嵩の無法を厳しく批判したため、嚴嵩の不興を買って、嚴嵩の腹心の部下楊順、路楷に殺害された。さらに、楊順、路楷は嚴嵩のご機嫌をとるため、沈青霞の長男であり、紹興府の秀才である沈襄にも魔の手を伸ばした。彼を逮捕して、護送の途中殺害するという計画を立てたのである。沈襄が逮捕されたとき、彼の妾である聞淑女も一緒に行くことに

決め、随行した。途中、沈襄は嚴嵩が自分を殺すことを耳にし、逃亡しようとしたが、聞淑女のことが心配で、なかなか決意が固まらなかった。その時、彼女は沈襄に逃亡を勧めた。護送の係官に、近くの街に金を借した知り合いが居り、その人から返済してもらうのだと嘘をつき、沈襄は彼女を残して逃亡した。その後、聞淑女は護送の係官が自分の夫を殺したと役所に訴え出た。彼女は役所の裁きにより解放され、尼僧の庵に住むことになった。その後、嚴嵩は失脚し、逃亡生活を送っていた沈襄が戻り、彼女との再会を果たした。

『智囊』と『情史』は聞淑女を物語の中心人物として描いているが、文自体が短いため、聞氏の人物像は大雑把にしか掴めない。馮夢龍は『三言』を編纂する際、史料に基づいて、物語の細かい部分に加筆し、彼女の人物像をより明瞭にし、彼女の智慧をさらに強調した。物語では、まず聞淑女を“才能もあり、智慧もある”女性であると紹介している。そして、彼女の智慧を強調するために、『智囊』と『情史』では触れられていなかった内容を追加した。途中聞氏は護送の係官に不審感を抱き、沈襄に次のように忠告した。“あの二人の様子を見ていると、良からぬ考えを抱いているみたい。私は女なので、（どこに行こうとしているのか）道をしらない。もしこれから先に荒れ野原が見えれば、用心しないといけない¹⁷⁾。”そのとき、沈小霞は“頷いたけれど、心の中では半信半疑であった¹⁸⁾”。しかし、その後沈小霞も係官の不審な様子に気づき、逃げようと考え始めた。『三言』では、沈小霞が逃げようとしたのは、聞氏の忠告によるものであった。また逃げる前、沈小霞が聞氏のことを心配すると、聞氏は“貴方は方法があればお逃げなさい、私は対処できるので、心配しないでください¹⁹⁾”と沈小霞を安心させた。彼女のこの言葉には相当な自信が表れている。彼女は自分自身どうすればいいのか全部わきまえていたので、沈小霞が逃げた後、少しも慌てず、どんな状況にも冷静に対応した。その後、彼女は自分の巧みな演技で、役所の官僚に自分は夫を係官に殺された被害者

であることを信じさせた。その後、庵に住み、自分の身を守った。このように、聞氏は“勇気もあり、智慧もある（有勇有謀）”人物として描かれている。

『三言』においては、馮夢龍が聞氏の智を賞賛している言葉は明確には認められないが、『智囊』「沈襄妾」においては、二箇所、それに該当する箇所がある。第一点目として、彼が自分の身を心配していると聞いた聞氏は次のように言う。“貴方は沈氏一族の子孫です。私のことは心配しないで、お行きなさい²⁰⁾”。しかし、馮夢龍は彼女を智慧をもっている女性として扱い、彼女のこの言葉を次のように理解していた。彼は評の中で、“自分は係官相手に上手く対処できると思っていたからである²¹⁾”と述べている。第二点めとして、本文の後に付けられた評には次のような記述が見られる。

 嚴氏が沈襄を殺すつもりがあるかどうか分からない。しかし、沈襄は本当に上手く逃げることができた。その上、妾の大騒ぎは本当にうまい演技であり、役所の官僚も彼女が言ったことを信じてしまった。故に、沈襄は役所の追跡を心配せずに逃げることができたのだ。……この妾と沈氏父子は同じ文章に記録されている。忠と智のどちらも一族に備わっており、素晴らしいことだ²²⁾。

聞氏は実在の人物であるが、『明史』などの史書には彼女のことは一切記録されていない。前述したように、馮夢龍は彼女に大変関心を持ち、自分が編纂した『情史』、『智囊』に同時に入れている。彼女の行いが変わる訳では無いが、視点を変えれば、同じ人物でも、異なる魅力が出てくる。沈襄が逮捕され、護送される際、聞氏がお供として彼の傍にいたことや、彼を先に逃がすために自分への心配を解消させていることなどを勘案すると、彼に対する彼女の深い愛情が表されていると考えられる。彼女の係官

を陥れるための演技は、機転なしでは成立しないであろう。沈裏がうまく逃げのびたのは聞氏在ってのことである。

『三言』には聞氏と同じように智慧で相手の男性の命を救った女性がいる。彼女の名前は張淑女である。馮夢龍が彼女の智慧を賛美する心情はその物語のタイトル「張淑女巧智脱楊生」の中に明らかに現れている。物語は正徳年間（1506～1521）のことである。楊延和は六人の友人と会試試験のために上京の途中、河南府栄県の“宝華禅寺”に泊まった。その寺の寺僧は悟石を初めみな悪人であり、楊延和たちが持っている財貨を狙っていた。その晩、楊延和以外の人には眠っている最中悟石たちに殺された。楊延和は寺から逃げ出し、近くの家を救いを求めた。しかし、その家も悟石の一味である張小乙の家であった。張小乙の母は娘の淑女に楊の番をさせ、寺へ通報に行った。その時、淑女は家の実情を楊に伝え、策略を巡らし、彼を逃がした。楊は後に及第し、宝華禅寺の事件を訴えた。悟石らは処罰された。そして楊は淑女を妻として迎えた。

前述した聞氏の智慧は夫を守る点であるが、張淑児の智慧とは機転のことを指すだろう。彼女は相手の男性を救っただけではなく、自分の身を守ることに成功した。楊が張淑女から本当のことを聞き、しかも彼女が自分を逃がしてくれるということなので、すぐにも逃げ出そうとした。しかし、張淑児が言ったように、もし彼がそのまま行ってしまったら、自分の母にすぐばれるので、自分も罰をうけることになる。そう言われても、楊には妙案が思いつかなかったので、彼女は一計を案じた。彼女は楊に自分を縛らせ、強姦未遂の末の逃亡劇を装おわせ、そして、旅費を出し、彼を逃がした。彼女の母が帰ってから、彼女はうまく母をごまかし、罰を受けずに済んだ。彼女のこの行為に対して楊は“仁愛と智慧両方を兼ね備える（仁智兼全）”と感嘆した。張淑児も聞淑女と同じように、どんな危急な状況に直面してもたじろぐ事なく、冷静にその状況を分析し、策略を考えて、危ない状況を乗り越えた。それを可能にしているのはやはり彼女たちの知

恵と機転、すなわち智慧である。その智慧は愛する相手だけでなく自分をも守っている。

四、『三言』に見る女性の才の特徴

『三言』に登場する智慧のある女性の物語を分析した結果、女性の“才”の特徴は次のようにまとめることが出来るだろう。

1. 才の性差

男女平等の観念は『三言』が呈示している最も基本的な命題である。『三言』の編集者の馮夢龍にとっては、男女はそれぞれ社会の半分を担っており、どちらも社会に不可欠な存在である。彼は男女の存在を太陽と月に喩えている。“男は陽であり、女は月である。月は日の光を借り、妻は夫と同じである。陽が沈んだら、月が出る。これは婦人が男性の助けであることを意味する。男女の智は陽と月のような智であり、日と月のような才である²³⁾。”もちろん、時代の制約があるので、馮夢龍が現代の意味での男女平等の意識をもっていたとは断言できないが、彼はすでに女性は男性の附属品ではなく、女性が男性より低い地位に置かれるべきではないと考えている。彼は女性の家庭内での仕事を肯定している。『三言』に登場している女性の中では、家の管理を一つの仕事としてきちんとこなしている女性が何人も登場している。また、男と同じように、家を守り、家族のために仇を討つこともできる女性も登場している。『三言』では、玉英、万秀娘、蔡瑞虹のような家族のために仇を討った女性を、言葉の限り賛美している。仇を討つのはそもそも男の役回りである。しかし、いざとなったら、女性は男性に劣らず仇を討つ事もできるのである。

したがって、男女間で才において優劣などないのである。

2. 男性を凌駕する女性の才

『三言』は、(i) 男女平等の観念を呈示しており、(ii) 女性の才能を肯定的に評価しており、(iii) 女性も男性の手本となり、智慧がある女性は時として男性を凌駕する場合もあるという考えを滲ませている。編者の馮夢龍はまず、才能や智慧を持つ女性を多く『三言』に登場させることで、明末に生まれた“女子無才便是徳”という風潮に疑問の念を投げかけた。彼にとっては、“才”と“徳”はまったく関係がない。“才のないことが徳とすれば、天下の何も知らない田舎の婦人たちはみな徳を持つ人になる²⁴⁾。”馮夢龍は、いざという時に、往々にして女性は男性より冷静であり、男性より知恵や機転に優れていると考えている。彼は『諭世明言』の第28巻「李秀卿義結黄貞女」において、“男子は慌てて間違える場合が多いが、婦人は良策を持っている²⁵⁾”と明言している。「沈小霞相会出師表」に登場する聞淑女や「張淑児巧智脱楊生」に登場する張淑児は其の好例である。

聞淑女は沈小霞が護送される途中、係官の様子がおかしいと気づき、ただちに沈小霞に忠告した。また、沈小霞が逃亡しようとした矢先、聞淑女のことが心配になり、なかなか決意が固まらなかったが、聞淑女の自信ある態度は彼の決意を固めた。彼が逃げた後は、実質、聞淑女は人質と同じである。二人の係官に対処するには自分の知恵や機転を働かせるしかない。彼女は勿論自殺するつもりはない。彼女はそれ以後のことを計画し、自分の身を守り、夫との再会を望んでいた。自分の身を犠牲にして相手を救うというやり方は勇気があると言えるが、決して知恵や機転のあるやり方ではない。相手を助け、自分の身にも被害が及ばず、双方が良い結果になることこそ知恵や機転のある方法といえるだろう。

馮夢龍は世の中では、智慧がある人物は、男性であろうが、女性であろうが、見習うべきだと考えている。彼は『智囊』「二十五 閩中賢哲」において次のように述べている。“人間は賢くなければ、愚かである。そうであれば、賢い者を見習う気持ちが常に必要になる。男性ばかりを見習う

だけでなく、女性の智慧も見習わなければならない²⁶⁾。”前述したように聞淑女、張淑兒のような女性は、男性ができないことを彼女たち女性がやり遂げ、男性より優れた智慧を持つ女性も存在することを、身を以って示している。彼女たちの行動を見れば、馮夢龍は“我々男性が恥かしい（慚余譎譎）”と感じていた。馮夢龍は聞淑女、張淑兒、蘇小妹、趙春兒などのような男子にも勝る智慧のある婦人に注目し、『三言』において、彼女たちの智慧を細かく描いた。馮夢龍は、男性より優れた才能を持つ女性を見習うべきだと考えていたのである。

3. 多様な女性の才

前述したように、“女子無才便是徳”に対して、『三言』の物語では女性の才と徳が関係ないことを表している。『三言』には才をもっている女性が非常に賛美されている。『三言』に見られる才は勿論学問的なものだけでなく、それ以外の才も含まれている。学問的な才を持っている女性といえば蘇小妹である。彼女の学問は男性よりはるかに優れている。しかし、彼女の優れた能力は花婿を選ぶときにしか発揮されなかった。学問で自分の才能を発揮できたのは黄崇嘏である。彼女は男装する事により、優れた学問で官僚になり、自分の才能を如何なく発揮した。彼女の場合、明らかに学問によって自身の存在意義を見出している。しかし多くの女性登場人物の場合、家を管理し、家計を支え、一家を繁栄させることなどに彼女らの才は役立っている。これは生活の知恵と呼べるだろう。また、聞き分けのない夫や父に対する忍耐強さも“才”とは呼べないだろうが、特筆されるべき点である。

五、結 び

明末に、“女子は才の無いことが即ち徳である”という考え方が広まり、女性の教育水準の低下や社会的地位の低下につながった。しかし、『三言』

には智慧のある女性が多く登場している。彼女たちの物語は、“才”と“徳”はまったく関係がないことを示唆している。彼女らが示した“才”とは学問だけではなかった。一族を束ねる能力、忍耐力、生活の知恵、そして、愛する男性を窮地から救おうとする知恵や機転なども含んでいる。これらはむしろ“智”と呼ぶ方が良い。すなわち、“智”こそ“才”なのである。

女性の智慧の発揮の経緯や方法に基づいて、学問型、内助・復讐型、男装型、援助型の四種類に分類し、各々の物語に関して詳細に分析を行なった。結論として言えることは、『三言』における女性の描写手法は、当時としてはかなり進歩的であったということである。知的な女性たちの行為を通して『三言』が訴えているのは、男女平等の理念にとどまらない。“才”は学問に限ったことではなく、男性が見習うべき一面を有している女性も存在していることを示唆している。当時の“才”の意味は学問を指していたが、『三言』における女性の才は、さらに学問以外の広く深い意味での“智慧”までも含んでいると筆者は考える。彼女らの行為を通して、当時の“才”に新しい考え方を吹き込んだと言えるのではないだろうか。

注

- 1) 陳東原の『中国婦女生活史』(上海文藝出版社 1990年6月)を参照。
- 2) 龔篤清『馮夢龍親論』(湖南人民出版社 2002年11月), 555頁。
- 3) 人有智, 猶地有水。地無水為焦土, 人無智為行屍。智用于人, 猶水行于地。地勢坳則水滿之。人事坳則智滿之。周覽古今成敗得失之林, 蔑不由此。
- 4) 馮子曰: 語有之: ‘男子有德便是才, 婦人無才便是德。’ 其然, 豈其然乎? 夫祥麟雖祥, 不能獲鼠, 文鳳雖文, 不能獲兔。世有申生, 孝己之行, 才竟何居焉? 成周聖善, 首推邑姜, 孔子稱其才與九臣埒, 不聞以才貶德也。
- 5) 可惜是個女子! 若是個男子, 可不又是制科中一個有名人物。(『三言・醒世恒言』, 125。)
- 6) 文書自古說三蘇, 小妹聰明勝丈夫。(『三言・醒世恒言』, 130頁。)
- 7) 累年不決者, 一經崇嘏剖析, 無不洞然。(『三言・喻世明言』, 230頁。)
- 8) 吾不用婦言而亡家國, 悔恨何及。

- 9) 有智識才能，家中大小事體，到是他掌管。(『三言·醒世恒言』，463頁。)
- 10) 不聽你言，致有今日。(『三言·醒世恒言』，465頁。)
- 11) 報仇雪恥是男兒，誰道裙釵有執持。(『三言·醒世恒言』，478頁。)
- 12) 自古道：‘有志婦人，勝如男子’。且如婦人中，只有娼流最賤，其中出色的盡多。(『三言·警世通言』，263頁。)
- 13) 在千辛萬苦中熬練過來，助夫成家，有個小小結果，這也是千中選一。(『三言·警世通言』，263頁。)
- 14) 善藏其用，以權其變。(馮夢龍『智囊』「閨智·木蘭 韓保寧 黃善聰明」の「述評」。)
- 15) 行不逾闕，謨能致遠；睹彼英英，慚余謏謏。集‘雄略’。(馮夢龍『智囊』「閨智」。)
- 16) 馮夢龍『智囊』「閨智·木蘭 韓保寧 黃善聰明」の「述評」。
- 17) 看那兩個澆差人，不懷好意。奴家女流之輩，不識路途徑，若前途有荒僻曠野的所在，須是用心提防。(『三言·喻世明言』，347頁)
- 18) 雖然點頭，心中還只是半疑不信。(『三言·喻世明言』，347頁)
- 19) 官人有路盡走，奴家自會擺布，不勞掛念。(『三言·喻世明言』，348頁)
- 20) 君一身，沈氏宗祧所係，第去勿憂我。
- 21) 自度力能擺脫群小故。
- 22) 嚴氏將要襄殺之，事之有無不可知。然襄此行去實多便宜，大干淨。得此妾一番撒賴，即上官亦疑真有是事，而襄始安然亡命無患矣！……而此妾與沈氏父子並傳，忠智萃于一門，盛矣哉！
- 23) 男，日也；女，月也。日光而月借，妻所以齊也；日歿而月代，婦所以輔也。此亦日月之智，日月之才也。(馮夢龍『智囊』「閨智 閨智部總序」。)
- 24) 無才乃可以為德，則天下之懵婦人母乃皆德類也乎。(馮夢龍『智囊』「閨智 閨智部總序」。)
- 25) 男子盡多慌錯，婦人反有權奇。(『三言·喻世明言』，229頁。)
- 26) 匪賢則愚，唯哲斯尚，嗟彼迷陽，假途閨教。